

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：43934

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07395

研究課題名(和文) 幼児期・児童期における嘲笑の理解と他者感情理解および高次の心の理論との関連

研究課題名(英文) The relations among understanding of mockery in the preschool years and beyond, higher-order theory of mind, and understanding emotion of others

研究代表者

伊藤 理絵 (Ito, Rie)

名古屋女子大学短期大学部・その他部局等・講師

研究者番号：70780568

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幼児期から児童期にかけて子どもの嘲笑理解がいかに発達するか、笑いの不愉快さの理解課題を作成し、得られた結果を他者感情理解および高次の心の理論との関連から検討した。年長児から小学1年生にあたる6歳から7歳にかけて、高次の心の理論の理解が進み、笑いの攻撃的な意図を読み取るようになる可能性が示唆された。また、失敗を笑われた後の感情について、「笑われて悲しくて泣く」ということだけでなく、悲しみ以外の感情を笑われたことに関連付けて予想するようになる傾向もみられた。これらの結果から、幼小接続期におけるの笑いの不愉快さの理解を踏まえ、「笑い」を用いた道徳教育について提案した。

研究成果の概要(英文)：This study examined how preschoolers and elementary school students comprehend mockery. The task of understanding unpleasure laughter was developed to consider the relateness among the understanding of ridicule, emotion of others and higher-order theory of mind. From 6 to 7 years old, understanding the task of higher-order theory of mind advanced. This indicated the relationship between higher-order theory of mind and realizing the aggressive intent of laughter. As children are older, they predicted not only sadness but also various emotions of others when they saw one who be laughed at. These results proposed an example of moral education using laughter based on the understanding of the unpleasantness of laughter in the early childhood.

研究分野：子ども学，発達心理学，保育学，教育心理学

キーワード：笑い 嘲笑 発達 感情理解 心の理論 接続期 道徳教育

1. 研究開始当初の背景

これまで提示されてきた笑いに関する理論のうち、笑いの攻撃性については、特に「優越感情理論」の中で扱われてきた。優越感情理論とは、他者の失敗や弱点を笑うことで、笑った者が快感(優越感)を得るというものである。嘲笑は、笑った者は快感を覚えるが、笑われた者には不快感情を生起させる攻撃行動である。しかし、子どもの笑いはポジティブな側面が強調されやすく、嘲笑のような笑いのネガティブな側面の発達については十分に扱われてこなかった(Billig, 2005/2011)。

笑いが不愉快さをもたらす場合があることを理解するためには、笑われた相手の感情を理解することや、他者の視点に立って言動を捉えるための他者理解の発達と関係していると思われる。そのため、他者が笑われている状況を目にしたとき、笑われた者の悲しみの感情を推測し、笑われた者の心的状態を理解するためには、他者感情理解や心の理論の発達などの要因が関係しているのではないかと考えた。

感情理解や心の理論の発達に関する研究では、心的状態の理解には、感情理解と心の理論の相互作用的な発達過程が存在することが示唆されている(Cutting & Dunn, 1999; O'Brien et al., 2011)。児童期以降に発達するとされる皮肉の理解には、心の理論の中でも二次的的信念の理解が必要である(子安, 1999)とも言われている。

よって、幼児期から児童期にかけて、皮肉や嘲笑の理解の発達がいかになされるかを検討することにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、幼児期および児童期にかけて子どもの嘲笑理解の発達について、他者感情理解および高次の心の理論との関連性から検討することである。

笑いは、笑う者と笑われる者との関係や、笑いが生じた文脈によって、親和的にも攻撃的にも機能する。しかし、笑いの優越感情理論をはじめとして、笑いとの攻撃性の関連が長きにわたって指摘されてきたにもかかわらず、笑いの攻撃性がいかに発達するかは未だ明らかにされていない。

本研究では、特に、幼児期と児童期の接続期にあたる子どもを対象に、笑われる不愉快さの理解の発達について、他者感情理解および高次の心の理論との関連も含めて明らかにすることを旨とする。

3. 研究の方法

嘲笑の理解の発達を他者感情理解および高次の心の理論との関連性から明らかにするため、以下の4点を中心に研究を進めた。

(1) 笑いに対する不愉快さの理解課題の検討 幼児の笑いの観察研究を基に独自に作成

した「笑いの理解課題(心理的苦痛課題, 身体的苦痛課題)」のデータ(伊藤, 2016)を再分析した。「心理的苦痛課題」は運んでいた麦茶をこぼしてしまう課題、「身体的苦痛課題」は走って転んでしまう課題であり、どちらも、それを見た他者に笑われ、笑われた子どもが泣いてしまうというエピソードである。提示順序については、カウンターバランスをとった。

協力児は38名(男児16名, 女児22名)であり、平均生活年齢は、64.9か月(SD: 9.86, レンジ46-80)、平均語い年齢は69.6か月(SD: 16.11, レンジ36-95)であった。生活年齢および語い年齢の平均、また、同時に実施した感情理解課題および心の理論課題の得点について提示順序による差はなかった。提示した各場面について、笑った理由と笑われた側の感情、泣いた理由および笑ったことに対する善悪判断とその理由について質問した。

(2) 嘲笑理解に関する課題の作成

不愉快な笑いの比較課題

前述した(1)の笑いに対する不愉快さの理解課題である「心理的苦痛課題」および「身体的苦痛課題」は、失敗した他者を見て、思わず笑ってしまった場面であり、笑い手にとっては、攻撃の意図がなく笑ってしまったことが、結果的に笑われた相手を傷つけてしまった内容になっていた。しかし、嘲笑は、笑いをういて相手を攻撃する行動であるため、笑い手の攻撃の意図を示す必要がある。そこで、「失敗を笑われて泣く」という結果は同じでも、偶然に失敗場面を見て笑う課題(偶然の転倒課題)と、意図的に失敗させて笑う課題(意図的な転倒課題)を作成し、それらを比較する課題の作成を試みた。この嘲笑理解に関する課題は、「偶然の転倒課題」と「意図的な転倒課題」を比較する課題であるため、「不愉快な笑いの比較課題」とした。

(3) 幼小接続期における笑われる不愉快さの理解と他者感情理解および高次の心の理論との関連

上述した(2)の「不愉快な笑いの比較課題」を用いて、年長児と小学1年生を対象に調査を行った。「不愉快な笑いの比較課題」の他、「感情命名課題」(cf. 風間他, 2013; 東山, 2012)、「Real-Apparent Emotion」(Wellman & Liu(2004)日本語版, cf. 東山(2012))、「二次的誤信念課題」(林, 2002, cf. 溝川・子安(2008))、および「偶然の転倒課題」を共通課題とした。

分析対象となった協力児は、小学校との接続期にあたる時期(2月~3月)の幼児10名(平均年齢6歳4か月: 6歳0か月~6歳9か月)および、小学1年生(10月)の児童24名であった。小学1年生24名のうち、6歳児が14名(平均年齢6歳8か月: 6歳6か月~6歳9か月)、7歳児が10名(平均年齢7歳2か月: 7歳0か月~7歳3か月)であつ

た。課題を実施する際は、年長児には紙芝居と絵カードを用いた1対1の対面式で行い、小学生には冊子に記述することを求め、集団で実施した。

なお、幼児10名のうち、7名は年少児のほぼ同時期に「不愉快な笑いの比較課題」以外の課題を実施していたため、年少時と年長時の回答の比較も行った。

(4) 「笑い」を用いた道徳教育への発展の可能性

小学校では、平成30年度から、道徳の時間が「特別の教科 道徳」として全面的に実施され、道徳教育は、道徳科を要として学校の教育活動全体を通じて行われることになった(文部科学省, 2017)。無藤(2009)は、日本の保育の中では、友だちと仲良くできることや社会・文化的な規範および道徳性を教えること等の人間関係が、とりわけ重要視されているものの、小学校以降の発達を見通した長期的な人間関係の育ちとの連続性を明らかにした上で、幼児教育・保育を行う必要があることを指摘している。道徳の教科化を考える上では、乳幼児期に育った道徳性・規範意識を小学校教育にいかに繋げるかが問われていると思われる。

以上のことから、乳幼児期の教育・保育と児童期以降の発達と教育の連続性について、幼児期の終わりまでに育てほしい姿(10の姿)の一つである「道徳性・規範意識の芽生え」と「道徳教育」に注目し、幼児期の終わり頃の発達を踏まえた「笑い」を用いた道徳教育について検討した。子どもの回答の個人差から、「考え、議論する道徳」の在り方を提示した。

4. 研究成果

上述した研究の方法に挙げた(1)~(4)について、以下のような研究成果が得られた。

(1) 笑いに対する不愉快さの理解課題の検討

麦茶をこぼしたことを笑われるという心理的苦痛課題よりも、転んだことを笑われるという身体的苦痛を伴う転倒場面の方が、おもしろさの理解がされやすく、転倒したことのおかしさから笑ったと回答しやすい傾向がみられた(例: 転んだのがおもしろい)。

一方、心理的苦痛を伴う麦茶をこぼした場面は、身体的苦痛課題よりも、面白くない状況にもかかわらず笑われたと見なされる傾向があった。転んだ人を見て笑うことよりも、麦茶をこぼした人を笑うことは、おもしろさを喚起しにくい状況を笑うことであり、笑いに対して不適切さを感じやすい課題であることが示唆された。

(2) 嘲笑理解に関する課題の作成

上述した(1)の笑いに対する不愉快さの課題の一つであった「身体的苦痛課題」は、転んだ人を見て笑い、笑われた者は泣くという

ストーリーであった。そこで、相手を転ばせようと石を置く場面を提示し、転んだ場面を偶然に目撃して笑ったストーリーと区別することにした。偶然に転んだ者を見て笑うという(1)の身体的苦痛課題を「偶然の転倒課題」とし、石を置き、その石に躓いて転んだ人を見て笑うという課題を「意図的な転倒課題」とした。

「偶然の転倒課題(身体的苦痛課題)」で用いる紙芝居の図版を絵カードにし、協力児の前に並べ(図1)、どのような話を説明するよう求めた後、ストーリーを改めて確認した。



図1: 「偶然の転倒課題」の絵カード

次に、「じゃあ、このお話、見てくれるかな。」と、「偶然の転倒課題」の下に、最初の絵カードだけが異なる「意図的な転倒課題」の絵カードを並べた。「偶然の転倒課題」の最初の絵カードは、友だちに呼ばれて走っている場面であるが(図1)、下に並べた絵カードは、友だちが石を置いている場面とした(図2)。



図2: 「意図的な転倒課題」の一番目の絵カード

一番目の絵カード以外は全て同じで、石につまずいて転ぶ場面、友だちが見ている場面、友だちが笑う場面、笑われて泣く場面である。

「偶然の転倒課題」と「意図的な転倒課題」を並べ、協力児に「このお話と、このお話はどこが違うかな?」と問い、異なる点を説明してもらった。そして「このお話とこのお話は、どちらがたくさん悪いかな?」と尋ねた後、その理由の説明を求めるということを、「不愉快な笑いの理解課題」の一連の流れとした。

(3) 幼小接続期における笑われる不愉快さの理解と他者感情理解および高次の心の理論との関連

年長児10名(7名は年少時と年長時の縦断的調査)と小学1年生24名に実施した共通課題の回答を分析した。本研究は、小学1年生には筆記課題としたが、幼児と同じように1対1の対面式で行った場合、結果が異なる可能性はある。結果については、回答方法の違いを考慮する必要はあるものの、年長になるにつれ、笑われたことに意味づけて説明する子どもが増える傾向がみられた。

笑われた後の感情を予想する質問では、幼児期においては年長になるにつれ「悲しみ」の表情を選択するようになるが、児童期になると、むしろ、「悲しみ」以外の表情図を選択することが増える傾向がみられた。

「不愉快な笑いの比較課題」では、年長児および小学1年生の6歳児は、「偶然の転倒課題」の方が悪いと回答する子どもと、「意図的な転倒課題」の方が悪いと回答する子どもに分かれた。「偶然の転倒課題」の方が悪いと回答する子どもは、年長児10名中4名、小学1年生6歳児14名中4名であった。「偶然の転倒課題」の方が悪いと回答する子どもに理由を尋ねると、「意図的な転倒課題」の最初の絵カードについて、「(石を)拾ってあげているところが優しい。」のように、こちらが石を置く場面としたカードを、“石を拾ってあげている”という思いやりに基づく向社会的行動であると解釈する傾向がみられた。つまり、意図的に石を置いたのではなく、転ばないように石をどかしてあげたにも関わらず転んでしまったという、あくまでも「偶然の転倒課題」であると考えていた。

一方で、7歳児は全員が「意図的な転倒課題」について、「石をわざと置いた」「転ばせた」のように、笑い手の意図を理解し、全員が、石を置く行為を「わざと」であると見なしていた。7歳児の方が、二次的誤信念課題の通過率が高かったことから(年長児6歳児:42.9%,小学1年生6歳児:42.9%,小学1年生7歳児70.0%)皮肉や嫌味を理解するのに必要とされる高次の心の理論との関連性があることが推測される。

以上の結果から、本研究で作成した「不愉快な笑いの比較課題」は、「意図的な転倒課題」のストーリーの教示をしないことで、幼児期から児童期の移行期においては、攻撃の意図の有無の解釈が分かれる課題であることが示された。

(4) 「笑い」を用いた道徳教育への発展の可能性

上述した(3)の結果により、幼小接続期においては、「意図的な転倒課題」を「偶然の転倒課題」と解釈する子どもと、笑い手が石を“わざと”置いて笑ったという嘲笑であると評価する子どもが混在していることが明らかになった。このことについて、7歳児よりも6歳児の方が、図版の表すストーリーに関する意図の読み取りが適切でなく、石を置いた場面を“間違っ て解釈した”と結論付けることも可能である。しかし、本研究ではストーリーの教示をしなかったため、自分が拾って置いた石に躓いた友だちを見て、思わず笑ってしまったという解釈をすることは間違いではない。

接続期にあたる子どもが「偶然の転倒課題」と「意図的な転倒課題」について、「石を置く」行為の意図を“思いやり”と判断する場合と“わざと”と判断する場合があることは、「笑い」をキーワードに同じクラスに異なる考えをもった子どもたち同士が、議論し合うきっかけとなる授業を展開できる可能性を含んでいると思われる。「笑い」は、喜びの感情の表れと言われる表情だが、喜び

というポジティブな感情をいつも他者と共有できるわけではない。よって、「笑い」という行動が意味する様々な感情に焦点を当てたテーマで話し合うことで、自分の笑いにまつわる行動を内省し、多角的に考える授業を展開できるのではないだろうか。

例えば、笑いの様々な経験を互いに振り返ることで、いじめる側が楽しいと思って笑っていても、いじめられる側は遊びとは思えないといういじめ問題を考える際の導入に用いることもできる。また、図版のストーリーでは、転んだ子は笑われた結果、悲しくて泣いてしまうが、(3)の結果から、小学1年生の方が、多様な感情を考える傾向がみられていた。このことから、笑った相手との日頃からの関係性や笑われた子の性格によっては、笑われて泣くだけでなく、「怒る」「笑い返す」「恥ずかしそうにする」など、他の感情表出を予想し合うこともできるだろう。「笑い返す」ということを取り上げても、それがすなわち喜びの感情の表れではなく、心の中は笑われて悲しいかもしれないが、笑った相手に悲しみを見せたくないという気持ちから笑ったということも考えられ、笑いがいつもポジティブな感情を示すわけではないという議論に発展できるかもしれない。

幼児期に育まれた「道徳性・規範意識の芽生え」を基盤に、小学校以降の道徳教育との連続性を考えた時、「笑い」のような日常的に身近な行動でありながらも場面や関係性が異なることで様々な解釈がなされるテーマを取り上げることで、他者との考え方や感じ方の共通点と差異を確かめ合い、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考える道徳教育に移行できるのではないかと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

伊藤理絵「道徳性・規範意識の芽生えから道徳教育へ - 「笑い」を用いた教材の提案 - 」名古屋女子大学紀要第64号(人文・社会編) 査読無、2018年、pp.111-118

〔学会発表〕(計5件)

伊藤理絵「幼児期・児童期における笑われる不愉快さの理解」日本発達心理学会第29回大会ラウンドテーブル『笑う・笑わせる・笑われる：発達心理学における笑い研究の可能性』(企画・話題提供) 2018年

伊藤理絵「接続期における笑われる不愉快さの理解 「考え、議論する道徳」からの検討」日本乳幼児教育学会第27回大会、2017年

伊藤理絵「幼児期における笑われる悲しみの理解」日本笑い学会学術交流支部第3回研究会『笑い学の可能性：笑う・笑わせる・笑われる』(企画・話題提供) 2017年

伊藤理絵「幼児期における笑いの不愉快

さの理解と感情理解および心の理論に関する縦断的調査」日本笑い学会第24回総会・研究発表会、2017年
伊藤理絵「幼児期後期における笑われる不愉快さに対する理解 - 心理的苦痛課題と身体的苦痛課題の比較」日本発達心理学会第28回大会、2017年

〔図書〕(計1件)

伊藤理絵『笑いの攻撃性と社会的笑いの発達』溪水社、2017年、189頁

6. 研究組織

研究代表者

伊藤 理絵 (Ito Rie) 名古屋女子大学短期
大学部・その他部局等・講師

研究者番号：70780568